アルツハイマー
進行促す物質特定
理研や同志社大など

理化学研究所などは、アルツハイマー病の進行を早める原因物質を特定した。脳の組織に蓄積するペプチド（たんぱく質の断片）の一種で、このペプチドが多いと発症年齢が早まる。病気の仕組み解明や治療法の開発につながる成果。成果は4日、米科学誌ネイチャー・ニューロサイエンス（電子版）に掲載される。

理研と同志社大学、滋賀医科大学、ベルギーのアントワープ大学の共同研究の成果。

脳細胞が死んで脳が萎縮するアルツハイマー病は、アミロイドベータ（Aβ）というペプチドが脳に蓄積することが発症原因の一つとされる。Aβは長さが異なる複数の種類があり、これまでは主に「Aβ40」と「Aβ42」が研究されてきた。

研究チームは患者の脳を調べ、よりアミノ酸の数が多い「Aβ43」も脳に蓄積していることに注目。患者の脳を調べたところ、Aβ43の濃度が高いほど発症年齢が若いことを確認した。Aβ43は脳にたまる蓄積物の「核」になり、Aβ40やAβ42の蓄積も促していた。Aβ43を標的にして、新しい治療薬や予防法を開発できる可能性がある。

「科学技術」は月曜日に掲載します。

平成23年7月4日朝夕
中日　日経　産経　京都　読売　毎日　朝日